

宗教に於ける超厭世的傾向

永 倉 唯 嘉

靜かに聽診器を胸にあて、心臟の鼓音に聽き入つてゐると畏しい勢で奔つてゐる血液の嚴かな音が如何にも生物としての自己の生命活動を判然と現實に感ぜしめる。然しこの鼓動の停止と同時に忽にして自己が滅亡するのだと想ふと全く頼りない氣がする。實に露よりも果かなきは生物の生命であり、風よりも頼りなきは生の營みである。露や風と嘆き、夢や幻と悲しみ、生老病死の四苦等と佛者が謂ふのも皆悉く生物の生命や生の營みの生滅無常なる相につきていふのである。その作の眞偽は兎に角所謂蓮如の「それ人間の浮生なる相」をつらく観じた白骨文章の如きはよくこれを物語つてゐる。今現に語り、笑ひ、悲しみ、唄ひ、踊り歩いてゐたものが突如として倒れ死んで行く相を想ふとまことに心あるものゝやるせない淋しさや悲しみにうたれるのも無理からぬところであり、亦死した最後、はや永劫にその實在の姿を現はさぬことの如何にも不思議に感ぜられるのも當然の想ひであ

らう。私共の意識に深かい意味をもつて生きてゐる他人がまだ現在してゐると意識してゐながらも、その姿を眼前から掻き消してゆく生別に於てさえ云ひ知れぬ淋しい悲しい氣持になるのだもの生涯——永劫にその姿の現在に接することの能きぬ死別に於ては無限に淋しい悲しい氣持になるに違ひない。亦自己が何時の日か突如として人間世界の一切のものから切離されて地に沈むのだと想えば楞牛でなくても誰しも耐えられぬ淋しい悲しい感傷的な氣持にうたれながら人間的生活に無限の愛著をさえ感ぜずに居られぬだらう。内省的で感傷的な人にあつては殊に生滅無常なる生物的生命活動者としての人間の死といふ不可避的宿命に對して底知れぬ淋しい感情に生の悲愴を唄たはずに居られぬだらう。千年も万年も生きたいといふ人間的欲求も無下に凡俗の迷情なりと下だすわけにはゆかない。何となればそこに眞劍な人間の欲求が見られるからである。眼前の細事に眩惑されて靜かに生命の事を想ひみて悟つた生涯を味はふことをなし得ないものは不幸である。聖日蓮が「まづ臨終のことを習ふて他事をならふべし」と言ふたのは死ぬことを想ふことをいふのではなく眞に生きることを生命のことを習ふて人生の本道を歩いて行けといふことである。宗教は本來生命の問題を中心としてゐる。凡てが *Lebensmacht* に充たされてゐる世界である。私はこの宗教的生命の問題を中心として宗教に於ける超厭世的傾向に就いて考へて見やうと想ふ。地に沈むでも尙自己といふものが存続するのであれば蟬の

様に地から復抜け出ても來るだらうけれど神話や信仰や詩や欲求とすれば別であるが輪廻轉生といふことも自然科学的には全然考へられぬ無根據な思想である。如何にも自然科学的知識に於て考ふれば生物的生命活動の止(死)といふことは何の不思議もない解りきつた生物的生理的な自然的事實であつて生理的心理學から考ふれば肉体即生理活動の止(死)と共に腦細胞や神經系統、感覺器關等の生理的活動に因つて生ずると考へられる意識活動も時間的にも空間的にも限界を有し或時或所に於て滅亡するものであるから生命の無限とか不滅の靈魂とかといふものゝ全くないことは動かされぬ科學的知識である。勿論生理的器關に因つて生ずる意識現象と云つても意識活動そのものゝ原因や根本が生理器關であるといふのでは決してなく、單にそれは意識活動の生理的器關を生理學的に考察する事に由つて生物的生命の時空的有限性を説かうとしたまでゝある。生理活動の因果關係は生理活動それ自身の上に於て考へらるべきであり、意識生活の動機因果は意識活動そのものに於て求めらるべきものであつて意識生活と生理活動との間に因果關係はないのである。心と体とは相互に影響し合ふものと一般に考へられてゐるがその間に因果關係を認め得る立場は生理的心理學といふ一つの自然科学的立場に於て言はれ得るであらう。然しそれは飽迄も自然科学的立場に於ける因果概念なる機械觀的自然界のことであつて理想化的活動と考へらるゝ精神生活の文化價値的目的論的世界とは全くその立場を異に

するものである。私共は「生物的生命」といふ同一語を全く異つた二つの意味に於て把握し使用し研究してゐることを注意しなければならない。一は生物學や生理學といふ自然科学の意味に於て、他は人生觀や世界觀といふ精神生活上の目的論的價值的の意味に於て把握し使用し研究し記述説明されてゐる。前者は生殖發生に始り生命活動の外現としての所謂生活を營み最後に生殖細胞と体細胞との分化に因る「死」に終る生物亦是生理態を或は分拆亦是綜合し、或は觀察亦是實驗し所謂經驗的方法を用ひ唯その存在自然の相に於て把握し記述説明する場合に用ひられる「生物的生命」は全く存在判斷に基く非價值的機械的所謂自然科学の意味に於て用ひられるものである。後者はかゝる立場の意味とは全く異つた價値判斷に基いて價值的目的論的哲學の意味に於て用ひらるゝ「生物的生命」であるから例へば自然科学的非價值的生物的生命概念に基いて樹立された世界觀や人世觀であつてもそれは依然私共の價值的目的論的哲學的意味を出でないものである。勿論生物學や生理學といふ自然科学的特殊科學の立場をとつて現はれて來る所謂自然科学的人生觀や世界觀が當然それが價值的哲學的立場の中に歸するのみならず自然的個別科學の特殊の立場を價值的哲學的に導いて文化的價值的哲學の普遍的立場に奪つて代らしめ様とすることは明かに部分を全体と見る偏狹なる考へである。自然科学的知識としての生命概念と價值的立場に於て考へられた所謂自然科学的生命概念とは全く區別さるべきであ

る。自然科学的知識は唯「在るところのもの」の普遍必然的機械的原理法則を發見しそれによつて自然の個々の經驗的事實を記述説明するところのものとして統一的体系的知識に組織構成されたものであるから所謂生物的生命に關する自然科学的知識も科學的知識それ自身としては全々別な獨立的知識であるが「在るべきところのもの」の世界即慾望と財（理想）との關係亦是現實的理想化的世界といふ價值的哲學的立場に於て言はれる場合の「生物的生命」は全く價值的意味に於けるものであるから哲學や宗教に於ける生物的生命の常無常等の論議は有價值無價值（非と無とは明瞭に區別せねばならぬ）といふ價值的意味に於て考へらるべきものである。

何故に生物的生命を價值的に見ねばならぬかと言ふに宗教や哲學が價值問題に成立する文化現象なるが故のみならず生物的生命は必ず無限的永遠的普遍的絕對價值的生命に對して有限的無常的部分的相對價值的生命として考へられるから全く價值的にみられたものである。價值意識は常に要求する世界と要求せざる世界、有價值のものと無價值のものとを對峙的に創造樹立する。そして理想的なるものに由つて反理想的なるものを征服せしめる。單に征服せしむるのみならず終には反理想的なるものを理想的なるものに由つて征服統一せしめ眞に理想的なるものとして生かすことに於て絕對的價值を主張する。宗教に於ても然りである。宗教信者の心の中には二つの世界が創造され相對峙せしめら

れる。この二つの世界は勿論私共の價值意識に因つて創造され亦は何等かの方法に由つて直觀亦は意識されたものである。そして私共はその理想的價值的なるものに由つて眞に生かされるのである。例へば國に於てはプラトーン (Platon, 427—347. B.C.) の感覺世界に對する超感覺的 *idea* の世界、キリストの地上に對する天國、佛教の穢土に對する淨土、娑婆に對する寂光土。亦人に於てはキリストの罪人に對する神。古代印度哲學の我に對する梵。佛教の衆生に對する佛といふ如き相對峙する價值的なるものが何等かの意味に於てその各々の後者の絶對性を主張することに由つて前者を征服統攝するのである。所謂救濟。濟度。成佛。往生。の如きは絶對的價值者の働きを示すものである。

扱古來哲學や宗教に於ける人生觀上の厭世思想は一般に生物的生命の無常觀と生物的生活の反價值觀に根ざしてゐると考へられてゐる。勿論厭世觀のなかには自己の將來に對する失望、過去の言行に關する懺悔・現在の境遇、生活の煩鎖不幸等現世生活に對する悲觀や嫌惡から來る厭世觀もあるであらう。亦生物的肉体的生命や生活の無常無價值を厭ふて靈界や精神的超越的實在界を空想する古い思辯的形而上學的厭世觀もあるであらう、或は單にネガティブな離苦といふことのみを重要視し、人間は肉体のみならず「心」あるばかりに一切の悲苦を生んだり感じたりするのだからピルローン (Pyrrhon, 360—270, B.C.) の様に判斷中止 *epoché* 否寧意識活動の停止をなして *Ataraxia* 亦は寂靜涅

弊を得る爲に無意識生活に歸り若くは生物としての有機組織を斷滅して無機物に歸ることを主張する佛者の所謂灰身滅智的な厭世觀もあるであらう。

又自然科学者は厭世觀の發生原因等に就て或は個人の健康狀態を生理學や醫學上から説明し或は生物的生命の無常や社會生活の不幸等に對する悲苦の感情とか生きんとする意志力——生活力といへば一般に外面的な物質的經濟的のみに考へられてゐるけれども人間にとつて更に根本的なものは物質や財の有無といふことよりも生きやうとする内面的能動的な意志力が最も根本的な生活力の重要々素である——の缺乏といふ心理的事實を或個人に於て指摘しそれが厭世思想を描かせて終に死に到らしめた等と心理學上から解釋し或は社會組織や制度の關係又は環境の影響を審査して社會學上から論究するものもあるであらう。

私は今此に此等の厭世觀に就て組織的に記述説明し嚴密にこれを批判し様とするのでもなく亦厭世觀の發生、動機、原因等に就て解説しその是非を論究し様とするのでもない。個人によつて複雑極まりなく時代や民族社會によつてその意味を異にする多様な厭世觀の經驗的事實を細大漏らさず記述し批判することは困難なことであり、亦かゝる煩雜多様な厭世的事實をあらゆる時——處——人に於ける總べての場合や意味を指摘して組織的科學的に説明することは私共の有限な經驗や知識を以て

しては全く望まらるべきことではない。唯私共はその時その處その人に於て最大の事實を科學的に記述し説明し及思想的に之を批判することに於て足りるのである。生理學や心理學等の科學的説明は厭世觀發生の生理的亦是心理的な状態や動機原因等に就て客觀的に觀察し記述し説明し得るのみで全く經驗的事實に限られてゐるのであるから厭世思想それ自身に就て説明し批判するものではない。されば科學的説明も事實の状态や動機原因等の客觀的解釋であるから經驗的知識として勿論客觀的眞理性を有し厭世觀を理解する上に重要なものであるが厭世思想そのものゝ理解説明批判といふことは全くその立場を異にする價值學特に哲學的立場に於てのみ可能である。私は今厭世觀や厭世的事實の經驗的發生的動機原因等に就て科學的立場に於て考へ様とするのではなく思想そのもの否、寧殊に宗教に於ける厭世觀に就て論理的哲學的に解剖し批判してそれが到り着く超厭世的傾向に就て論じてみやうと思ふのである。

既に述べた様に厭世觀の根本には共通な然も重要な要素として人間生活の無情殊に生物的生命の無常といふ觀念が流れて此等厭世觀の動機原因をなしてゐる様に思はれる。何となれば若し何等か存在的意味に於て生命活動が永劫であると意識されてゐるならば現世的生物的生命の單なる忌避によつてその生命活動を悲苦の地獄から救ふことは他土の世界を豫想しなければ不可能であるが然しそれでは

全く生に對して一時的忌避を企て生への反逆をなしても若し永劫に生を免れぬものならば結局その自殺的行爲も徒勞に歸するからである。亦永生といふ事が決定的なるものと意識されてゐるならば人は寧ろ有限的生物的生命の無常滅亡を教ふる生物學や地球崩壞の終末を説く地文學や生理活動の止に依つて意識活動の斷滅を教ふる經驗心理學の如き自然科学的知識に基く特殊自然科学的世界觀や人生觀の下に生の一時的癡痺陶醉を味ふ爲に自暴自棄的敗類者の享樂主義に陥るものが多いに違いないのであるが私共の經驗的事實として生物的生命活動の無常滅亡といふことは動かされぬ確實な知識であり亦それ以外の生命活動は經驗的知識に於ては全く考へられぬから自然科学的立場以外の即存在の世界以外の世界例へば價値の世界に於て可能であるとしても生物的生命の無常滅亡觀は動かすべからざるものである、この生物的生命活動の無常滅亡觀が厭世行爲を成就させ、これが亦厭世思想の根底を流れてゐる共通觀念であると想はれるのである。生物學地文學等から考へても人類の永存といふことはなく亦心理學から考へても靈魂の不滅とか輪廻轉生といふことは全く考へられぬ、人間の生命は生に始まり死に終るのである。自然科学的知識からすれば全く死後の生活や世界といふものは無いのである。斯る學說に對して能く宗教信者は自然科学的知識は萬能にあらず。人智は有限なり。故に死後の靈魂やその生活及世界を見る力なしと力説して自然科学的知識の否定を爲す者があるとすればその

人は自己に自然科学的知識の否定を主張する力もないことを自から主張するといふ自己矛盾の愚を曝らし自殺的論法に陥入つてゐることを知らねばならぬ。私共は存在に對する自然科学的知識の嚴然たる獨立性と浸すべからざる權威とを認めねばならぬ。従つて自然科学的知識としては人類の永存や靈魂の存在及その不滅性並に天國や西方淨土や地獄といふ世界が全くないことを承認せねばならぬ。若しさうでなかつたならば人間は自己の理性に對する信賴を全く根本的に捨てるといふ人間自身の自己否定即自殺に陥る外はない。かゝる自然科学的知識に對して宗教はこれを肯定することも否定することも能きない。何となれば宗教には自然科学的知識に對して肯定亦は否定する何等の權利もないからである。自然科学的知識として人類は永存せず神は實在せず、靈魂は存在もせず従つて不滅にもあらず天國や地獄といふ世界も宇宙の奈邊を探查しても全く存在するものにあらずこの主張が確實不動のものであると論すれば宗教信者は宗教の根本を倒壊されたかに感じて或は狼狽し或は反駁挑戦して所有思想史上に見らるゝ如き自然科学と宗教との争を想像するであらう。如何にも自然科学は神、靈魂、天國の實在のみならず人類の存続といふことを全く否定し、宗教は之を肯定して然も之に據つて成立してゐるのであるから一見全く矛盾する重大問題であるかの如く考へられる。そして結局此場合宗教信者は斯く主張するであらう。自然科学的知識は人間の有限なる經驗的知識に據つてのみ見る世界な

るが故に神や靈魂や天國の如き超感覺の世界を見る力が無い。宗教の世界は知識に非ずして佛知や恩寵といふ如き信仰意識に據つてのみそれ等の實在界を見得るのであるから自然科学者の經驗的知識の量り知ることの能きぬ世界である。反之自然科学者は嘲笑冷罵するであらう。全く無きものを有るゝ信じ、見られざるものを見得ると空想し、興奮に因る感情の痲痺陶醉者、幻を迫ふて走る夢遊病者に過ぎぬ。宗教は阿片である。人間の文化生活を害する毒であると。私共はかゝる水掛論争が各々全くその知識の限界を越えた無益の論争なることに注意せねばならぬ。勿論相矛盾して兩立し難き不統一的思想はその思惟の本性上宥るされなれないに違ひない。けれども此自然科学と宗教の立場は全くその世界を異にするものである、立場を異にするものゝ間に於ては全く矛盾はあり得ない。同一線上の相逆行する二つの汽車は衝突するが異線上の二つの汽車は如何に何方に走つても全く相關せざるところである。自然科学者は自然の存在に關する非價值的知識の世界であり宗教は文化生活の理想に關する價值的世界である。されば全くその成立の根據を別にしてゐる。従つて私共はカント(Kant 1724-1804. A.D.)と共に神を存在として古來の實體論的に或は宇宙論的に或は物理神學的的目的論的に証明せんとすることの全く不可を主張するのみならず神を存在として自然科学的知識に於て見る事を全く斷念し唯實踐理性の要請としてのみ成立する價值的なものとして考ふべきである。と同時に存在として假定

するのでなく價値的生活を深き根底に於て生かすところの絶對價値的實在として體驗に於てそれ自ら現實するところのものと考へねばならぬ。さればかゝる神の實在に對しては全然自然科学的知識の關知せざるところのものである。自然科学に於ては經驗的であるも自然的存在としての神や靈魂を否定するに止まるものであるから全くこの立場を異にして成立するところの理想目的であるも體驗せらるゝところの價値界のそれ等に對して云云すべきものでもなく亦それに立入つて肯定亦は否定するといふ權利を有しないのである。信仰に於て體驗せらるゝところの宗教の價値的事實は文化科學亦是哲學に於てのみよく認識され把握主張されるのである。故に私共の批判哲學的立場に於ては一面自然科学的知識の獨立性を保證し従つてそれが説くところの知識内容に對しては絶對に容嘴しないと共に他面的知識の獨立性を保証してその信仰内容に對しては絶對に容嘴するを得ないものである、唯自然科学的知識の上に世界觀人世觀を立て、形而上學に獨變し宗教の信仰内容が亦思辨的形而上學の仮面を覆ふて相互に相戰ふ時その各の立場を明かにしその各の知識の權利を無視し限界を越えたる場合警鐘を亂打して各々のその成立根據を明かにしその限界を規定する、かくて自然科学は宗教を犯すことも宗教が自然科学を壓することも能きぬことを理解せしめる。されば自然科学が否定する神や靈魂の存在は全く宗教が肯定する神や靈魂の存在とは全く意味を異にして居るものであるから一見矛盾に見えた

るものも全く兩者相互に相關知せざるところのものである。従つて神亦是靈魂といふ同一語ではあるが自然科学が否定するところのものと宗教が肯定するところのものは全く本質的にその意味を異にするのであるから自然科学的知識の主張も宗教の主張も共に眞實なるものであつて決して相矛盾するところのものではないと云はねばならぬ。實際に於て自然科学者に宗教信者あり宗教信者に自然科学者があるのも當然の事實であるといはねばならぬ。私共は一面自然科学的知識として生物的生命活動を考へその無常を是認すると共に他面理想的生命活動としてその高下淺深是非善惡を味はひみてその價值的意味から或は否定し亦肯定することが能きる。この意味は先に述べた生物的生命といふ同一語の異義を照合して考ふれば明瞭するであらう。既述の如く生物的生命が一時的有限的現象なることは宗教に於ては價值的意味からは是を考へ斯る無常觀を根抵として厭世觀が發生描出される。斯る思想に基く厭世觀は單に自己を殺すことに由て一切結末を遂ぐるからそれ以上想ひ及ぶ何物もない様にはれる。乍然實は然らずして、その背後に於て生命の常恒といふことが生命の無常を悲しませ厭世觀を惹起せしめてゐるのである。厭世觀に於て意識されてゐるものは生物的生命の無常であるがその無常を意識せしめてゐるものはより深かき普遍常恒なる生命の意識であることに氣付かねばならぬ。

古來キリスト教に於ても佛教に於ても凡そ宗教と名付けらるゝものは單にかゝる生命の無常斷滅を

説かず必ず彼岸の世界や永劫に働ける絶對的生命者（神）を信ずる。例へ厭世的傾向を多分に有つてゐるものでも一面現世の一时的有限的生命活動を想定してこれを厭離し他面彼岸の永劫的無限的生命活動を有する絶對者を想定してこれを渴仰戀慕するといふ様に宗教的厭世觀は常に同じく後者を豫想し根柢として理想標的としつゝ常に兩面を相關的に有してゐる。かゝる二元的生命觀に於て現世的生活の厭離（否定的、消極的）に重心を置くものと、彼岸的生活の欣求（肯定的、積極的）に重心を有してゐるものとの二つの傾向があるのを注意せねばならぬ。多く前者を指して厭世觀と稱ぶ場合が多い。それは厭世觀といふ字義が前者に相當してゐるからである。けれども單に現世を厭離するといふのみでは何等宗教的と云ふ性質を持たない。何となれば宗教は常に理想世界を目的として成立するからである。宗教に於ては單に絶望に因つて自己を殺すと考へられる消極的なるものに於てさえ本來の世界彼岸の生活を漠然ながら意識してゐるし亦積極的なるものにあつては寧ろ永劫の生命や彼岸の幸福なる生活を欣求する餘り生滅無常なる生物的個人的生命を殺すといふ善導の如き往生思想を持つのである。他土を欣求するといふ点から考へると何等悲觀や厭世をして居るのではないから厭世觀と考へられぬが然し此土を厭離するといふことが必ずその他面に隨伴してゐるから勿論厭世觀として積極的な排現世的なものである。宗教價值から考ふれば單に現實の現世的生活を厭離するといふ動機に因り彼

岸的生活を望むといふ消極的なるものよりも理想の彼岸的生活を欣求する餘り現世的生活を厭離するといふ積極的信念に基く厭世觀の方がより深くより高きものである。勿論理想主義的二元的生活觀に基くこの二つの傾向は相互關係を有つてゐる不可分のものであるがよく考へてみると此等の厭世觀に於て現世的生の否定をなすのも單に死なうと思ふ動機に因るのでなく生きやうとする本能亦是意志に基くものである。元來自ら生きんとする熱望の餘り生きるべき理想を失ひ現在に於ける自己の將來に於ける理想が自己の力の到底及ぶべくもないことを悲しみ、現在の自己否將來の自己に望みを見出し得ず終には生存の價值否定的思想に基いてそこに厭世觀が生れるのであるから經驗心理學上から考へると一般に厭世觀は生に對する失望に基くと考へられるがその實深かい生そのものへの執着が生に對して失望を起さしめ終には自己を殺すに至るのである。即自己を「生かさうとするもの」が自己を「殺す」のである。然し自己を殺して無に歸すと思ふてもその實彼は自己を殺すことに由つて或世界に生きてゐるのである。超個人我は個人我を殺す、神は人を殺す。人は殺されて眞に人は神に生きる事が能さる。生への意志も執着も持たないものに自己を殺さう等といふ深刻な考へが起らう筈はない。かゝるものに於ては生死のことは意識外のこと故厭世といふこと自身が既に無意味である。厭離とか欣求とかといふことは元より私共の欲望及理想に基くものであり此土他土といふことも欲望生活

に因るものであるから價值觀上に於てのみ言はるゝことである。何ものが自己の理想を欲求しその欲望の満足を得られぬ時初めて失望が起り失望の極自己否定的厭世觀を抱き自殺を決行する。自己否定は自己と環境との關係に於て生ずること考ふることも能ざるが飽迄も欲望と理想の關係に於けるその充足如何に因る。人間が萬物の靈長たる所以はその理想化的生活をなす点にあり自然の理想化といふところに文化が成立する。私共の生活は凡てこの理想に關係する。經濟學に於て欲望と財（被欲望物）との間に於て價值關係が生ずるといふのも宗教學に於て宗教とは人（欲望）と神（理想者）との（價值的）關係なりといふのもよくその間の事情を物語つてゐる、單に生の無常を悲しむ者と雖もその生に對する自己の欲望の滿不滿に基いて起されるのであるから寧ろ生そのものへの執着といふよりも一步立入つて考ふればそれは欲望の滿不滿に因る價值事實に基くものといふべきである。故に價值が眞に生命をして生命たらしむるものだといはねばならぬ。宗教に於て——文化生活は凡てさうである——謂はるゝ生命概念は凡て價值的生命であるといふことが能きる。現世的とか彼岸的といふことは全く價值的に考へられて區別されたものであるから此等兩界に對する否定も肯定も價值的立場に於てなされるのである。そこで現世的生の否定をなすには何等かそれ自身に否定さるべき缺點と理由根據とを有しなければならぬ。勿論現世的生それ自身では自己を評價し否定する何等の理由根據も評價

の標準も有たぬのであるから否定も肯定もそれ自身としては全く不可能のことである。然らば現世的生を評價する價值標準とは如何なるものであらうか。正しく此價值標準は理想的生そのものでなければならぬ。理想的生に相照合して始めて現實的生の缺點を觀じ無價值を認識し且これを評價することが能きる。理想的生といふ價值標準に據つて現世的生が評價され然して後初めて現世的生の否定が可能となるのである。即無常的有限的生は永劫的無限的生を理想とし標準とするから厭離され否定されるのである。單に現世的生の無價值や價值否定を主張する消極的厭世觀も必ず此理想的彼岸の世界を豫想することなしに生ずるものではなく亦理想的彼岸の世界を欣求する餘り他面現世的生を厭離する積極的厭世觀に於ては更に明瞭にこれを觀取することが能きる。

私共は右の如き理想主義に基く現世否定的厭世的宗教に一見全く逆反する現世肯定的樂天的宗教を見る事が能きる。一般に現實主義の宗教と呼ばれてゐる。然し現實主義といふこの語は極めて誤解され易い。それは人類の生命活動の究極の意味は因果法則に因つて自然——萬物を支配し現實の幸福を増進し現實的欲望の満足にありとする實證主義 *Positivismus* と間違へられ易い。唯在るところのものは現實的事實のみであると考ふる實證主義は全く宗教と相容れぬものである。何となれば宗教は何等かの意味に於て常に理想を追い理想に據つて生きるものであつてそれは本質的に理想主義に立脚

するからである。單なる現實的自然主義は宗教の本質を無視するものである。亦總ての文化は人間の實際生活に役立つ爲にのみ必要であるといふ實利主義 (Pragmatism) と間違えられ易い。實利主義は學問も實生活の爲に宗教も實生活の爲にのみ必要なりといふのであるがそれは明かに學や宗教の神聖を冒贖するものである。學の爲の生活宗教の爲の生活こそ神聖なるものである。勿論かゝる實利主義と間違ふべきではない。故に現實主義の宗教と云つてもそれは所謂厭世的宗教の現實否定主義に對する現實肯定主義といふ意味であつて兩者共に理想主義に立脚してゐることは動かし難いのみならず共にそれが本質的に宗教と稱ばれる所以でもある。所謂現實肯定的宗教はその本來の理想世界を現實世界の中に實現して眞に理想の實現であると共に更に理想が自らの本然の姿を表はす世界が現實世界即現世であるといふ点から依然として理想主義に基くものである。然してそれが一面に於て理想的生を考へ他面に於て現世的生を考ふる点に於て厭世的宗教と何等その價值的意味に異なる處はない。亦それが單なる現世的生を厭ふて理想的生を渴望する点に於ても異なる處はない。唯厭世的宗教も理想的生に由つて現世的生を救ひ以て眞に生きやうとするものであり現實的宗教も單なる現世的生を理想的生と見るのではなく理想的生に據つて現世的生を眞に生けるものと觀て現世的生を救ひ以て眞に生きやうとするものでありそしてそれが共に信仰意識に於て成就されるといふ点から考ふれば宗教哲學の立

場から兩者の宗教的價値に就て差等是非を一概に附けらるべき性質のものではない。勿論既成宗教が如何なる意味に於て現世的生を觀、如何なるものを理想的生としてゐるかは各宗教の教義内容に立入つて味ははねば解らぬことであるが教義内容に立入つてその是非善惡を評價することは宗教哲學の權利外のところであるから慎しまねばならぬ。唯私は次の如く言ひ得るであらう、宗教は理想に立脚してゐる。従つて厭世、樂天何れを問はずそれが價値意識の要求に基き理想的生と反理想的生換言すれば彼岸的生と現世的生とが一往對比的に差別され再往後者が前者に即現世的生が何等かの意味に於て理想的生に統攝され救済成佛せしめられる。即宗教の本質からして理想化される世界であるといふことを。如何なる意味に於てか宗教は現實的生を理想的生に由つて救ふ理想化生活といふ意味から所謂厭世的宗教も樂天的宗教も共に現世的生活を厭離しつゝ然もこれを救ふといふ超厭世的なものであることを私共は理解することが能きた様に想ふ。ところが私共は極めて重要な最後のものを殘してゐる。何となれば以上に於て説かれた有限の無常的相對的價値的な現世的生と無限的常恒的絕對的價値的な彼岸的（理想的）生とは私共の價値意識に基いて創造され判別されたる二つの相對的價値界である。現世的生が厭離されるのも理想的彼岸的生に對比して考へられる爲であり彼岸的生が渴仰されるのも現世的生に對比して考へられる爲である。さればかゝる彼岸的生は絕對的生ではない。寧ろそれは相

對的なものであり同一像の表裏と考ふべきものであらう。然し表裏を合しても同一像は出来ない。何となれば如何に二つの世界を一つにまとめ様としても依然として二つは二つであるからである。されば現世的生と對比して描かれた彼岸的生に由つては如何にしても現世的生は統攝され救済されることは出来ない。創造され考へられたる絶對的理想的生は價值標準とされ亦それに依つて現世的生が評價されるには違ひないが、斯る理想的生は亦現世的生に對比して評價されるものであるから眞に絶對的無限的永劫的なる生では無い。相對に對する絶對は依然として相對的絶對であつて眞の絶對ではない。従つて創造され考へられた絶對的理想的生はそれ自身に依つて現世的生を厭離することも統攝することも乃至は救済することも出来ない。斯る立場に於ては何故に絶對的理想的生はその相對性を抜出ることが能きぬのであらうか。それは全く創造され考へられたるもの即ちその二つの世界は共に意識内容であるに止まるからである。従つて意識内容としての二つの世界が對比的に考へられ全く異つたものと想はれるのは當然の事である。されば私共はかゝる死せる抽象的な意識内容としてのもの以外の何物かを考へねばならない。如何にしても客觀的意識内容とならずして然も意識内容を創造し統攝するものを考へることが能きぬだらうか、宗教に於ける先驗的なものを考えることが能きぬであらうか。私共は生きた具體的な普遍的一般者を考える事が能きぬであらうか。私共をして厭世せしめてゐる

ところのものは何であらうか。それは生きた普遍的理想的價值的絶對者でなくて何であらう。意識一般を實在と考へることは許るされないけれども宗教はある生ける普遍的絶對者を考へることなしに宗教を理解することはできない。かゝるものこそ創造者であり統攝者である。かゝるものは客觀的に觀ぜらるゝ内容的なものではなく常に一切の背後にあつて一切を創造し統攝してゐるものである。私共はこれを直觀に現はれる主客未分の實在者といふことも能きやう。かゝるものが意識の背面にあつて初めて厭世の意識も欣求の意識も生れるのである。従つて眞に普遍的理想的價値者が生きてゐる世界である。理想的世界が欲望されるのは現世的生に對する缺乏の感が然あらしめるのである様に考へられるが實はその欲望の意識はその背後に完全者普遍者が働いてゐるから現世的世界の不完全を意識し缺乏の感を抱き、その意識、その感が強く働けば働く程、強く完全を欲望するのである。それは二つの世界が意識内容となつてゐる相對的意味のものゝ場合とは全く異り普遍的完全者が不完の何れの世界にも現世彼岸の何れにも一切に生きてゐる即普遍者自身が働いてゐる絶對の世界である。私共はかゝる普遍者を絶對價值的實在者と呼ぶことが能きであらう。従つて不完全なる現世的生の成立も厭世の情も亦完全なる彼岸的生の成立も欣求の情もその根本に完全なる理想的絶對的價値者が働いてゐることに因つて初めて可能であると言はねばならぬ。普遍的完全者のみなく普遍的完全者を

見、佛のみ能く佛を見るこゝが能ざる。かゝる生ける普遍的完全者に由つて意識内容としての兩界が創造されかゝるものが眞に此彼兩界を生かすものである。斯く考へることに由つて初めて眞に統一的絶對的なるものを考へることが能ざる。絶對的無限者の自己限定に由つて有限者が生れるのである。内容として考へられた彼岸は有限の彼岸である何となれば現世に相對せしめられたものであるからである。生ける絶對的生のみよく相對的生を生かし眞に生ける救済を想ふことが能ざる。されば無限者は有限者に内在すると云つても有限者は無限者に據つて生かさざると云つても同じである。かゝる意味から親鸞の如きは佛力の外何ものも考へず信力さへも佛力なりと一元的に徹して來たのであらう。單に上昇的に理想的彼岸の世界を欣求するといふのみでなく彼岸の世界否普遍的完全者が下向的に來迎して現世を救済するといふ世界は既に厭世觀ではない。亦上昇的に彼岸を欣求するのも實は究竟者それ自身の自己反省の心であり行であつて現世を最も強く生かし眞に現世をして現世たらしむるものであるから最も深かき彼岸の立場に於て現世を生かしてゐるものと言はねばならぬ。

元より事實、實在する生命活動に二つの全く別個のものがあり得ないことは明かである。價值意識がかく二つの世界を判別するに過ぎぬ。價值意識と云つても別に價值意識といふものが獨立的に實在するわけではない。私共は宗教に於ては先づ第一にかゝる唯一絶對的價值的實在者を考ふることなし

に何事も論ずることはできない。かゝる實在は事實として思惟言説を絶したものである。思惟し言説されたものは抽象的なものであるに過ぎぬ。具体的事實としての實在者は直観に於て自己自身を顯現する。思惟は直観の發展といふことが能きるが思惟言説された實在は既に普遍者でなく思惟内容としての部分的なものである思惟内容となつた部分的なものをつつた手懸りとして私共はその中に普遍者を観る。かくて觀られたる普遍者は抽象的なものである。實在の似姿に過ぎない、私共が思惟によつて今把握したところのものも抽象的理論に過ぎぬことは論ずる迄もない。直観的實在的に考ふれば生命は唯一絶對なるものであると同時に内面的聯續を保つて無限發展をなすものである。價值的絶對的實在者が直観に於てそれ自身を現はして來る。そしてかゝるものが眞に三世十方を貫徹する絶對者であるといふことが能きる。宗教は徹頭徹尾神が「生きる世界」である。そこには現實も理想もない。唯神が生きる世界こそ眞に光明壽命無量の世界である。これに對すべき何の世界もないそれが總ての世界であり絶對の世界である。

×

×

×

×

私は今此に筆を擱くに方つてもう一度論頭に還つて考へてみよう。周圍の人々が死ぬのを觀て淋しい悲しい心持ちになるのは何故だらうか。心理學的には他人の死に於て自己の生物としての死の宿命

を直接聯想するからだといふ聯想説とか自分の感情を彼に移入することにより彼を慫み悲しむ情が起るのだといふ感情移入説等に依つて説明されてゐるが私は單に他人の死によつて自己の死を聯想するからさか或は自己の感情を彼に移入し亦は移入することによりて彼の感情が更に自己に移入され斯くて自己感情の融通交錯によりて淋しい悲しいといふ氣持になるのだといふのでなく或は亦他人は自己の意識に内在する他人なるが故にその内在的他人の消失は自己意識の一部の滅亡消失であるから力を落して悲しむのだといふのでもなく、全く自己が彼に於て生き、彼が自己に於て生きてゐたからであると思ふ。即彼に生きてゐた自己も自己に生きてゐた彼も個人我對個人我の關係ではなく超個人我の中の個人我であり然もその個人我に内在する超個人我のこゝろであるから要するにそれは一自我のことであり、その自他超越的自我の生き方に對する言ひまわしの異に過ぎぬ。正しくそれは超個人我が個人我の經驗的價值的存在としての姿の消失を悲しむこゝろである。價值的に生きる即永劫無限なる絶對的價値者としてのこゝろが普ねく恒に強く働けば働く程經驗的現世的生命の消失を悲しむ情が一層深かいのであらう。それ自らの姿を直觀に於て表はして來る他人自体といふ直觀的實在者がその直接的現實の姿を消失して再びそれ自身の現實的姿を表はさず單に再生觀念として反省意識に非實在的觀念に依て追憶想起されるに過ぎないからといふのでなく亦單にその悲しみが單なる個人我の悲し

みでなく個人我の背後なる普遍者がそれ自身の價値的見地から「他者」といふ個體的經驗的存在を惜しむこゝろからであると想ふ。單に死を悲しむその情が佛だといふのでなく實は自己に於ける普遍者即佛が悲しむでゐると考ふべきである自己の死を悲しむといふのも佛の情から悲しむのでなければ無意味である。千年も万年も生きたいといふこゝろは凡俗の迷情でなく真に佛がさうこゝろさせるこゝろであると想ふ。

——一九二九、一〇、二八、——

或舊い原稿の一部を幹事君の懇請により拔出して淨書したのであるが締切期日が既に過ぎて再讀熟考の時を興へられずして奪はれた爲に思想の未熟、叙述の不正、語の過不足、意味の不徹等種々の缺点を多分含むでゐることゝ慮ふ。殊に生命、生活、生存といふ如き語の區別を概念的に規定して論を進めてないのは舊稿の一部の拔出であるから致方ないとしても讀者に多々煩ひをかけることゝ憶ふ。伏して洪湖の智者の叱正を希ふ。但しこの稿を讀みて他宗から我宗を學ぶことをせぬ爲に外道謗法呼ばはりされることば御免を蒙りたい。唯哲學の立場に於て自然科学に對して宗教の立場を辯護した点を容れられ多少なりとも所論に拾ふべきものありとすれば喜び身にあふるゝを覺ゆるであらう。